

わたしが今日まで劇作家であり続けられたのは、劇団「空間演技」を結成したことに起因がある。年に1回は新作を書かなければならない。劇団を結成した時代は前衛劇がはやって

いた。不条理劇である。脈絡などはいらない。俳優も役名などはなく、男1とか女Aとかである。ある俳優が「やはり役名が欲しいのが役者です」とつぶやいた。

わたしはやはりに逆らうように方言で戯曲を書いた。これは

戦略であったと言っている。芝居が終わり、帰路に就く観客は「なんば言いよるとか」とか「ぐらぐらすんのう」といった舞台の方言のまねをしていた。「やったな」と喝采をした瞬間である。わたしは東映映画の「仁義なき戦い」の終了後に、肩を怒らせて広島弁で帰路に就く観客

をつた。青年座の「亜也子」は1年もかけて書いた。火鉢に炭が入っていた季節から、火鉢に炭を入れる季節に書き上げた。青年座は青年ばかりではなかった。昔の青年から、いまの青年まで人材は豊富であった。幾度も読み直して、鉛筆で推敲を重ねた原稿用紙は、手あかでぼろ

れる桜の古木がある。これがなにを象徴するかは、おわかりいただけるはずである。「亜也子」の新劇系の全国で上演回数はトップだそうである。まだ抜かれていないらしい。劇団の執筆料は安い。とても1年の生活が成り立つ額ではない。1カ月も成り立つかどうか。し

公演はカットなしが条件であった。俳優座には女の松浦四部作を書いた。ふゆという女を主人公に春夏秋冬を書いたのである。家と戦後と嫁と舅、小姑。これにも星鹿の祖母がどこかにいた。そんなこんなとやりながら劇団「空間演技」を維持して今日に至っている。幾多の人が来りて去った。

推敲重ねた亜也子

を知っていた。「最後じゃから、

ぼろになっていた。

いうとつちやるがのう。狙われる奴より狙う奴の方が強いんだ」

「亜也子」にはひとつ決めていたことがある。それは「海」という言葉を使わないということである。海がない肥前松浦の物語である。海とは母である。副題は「母の桜は散らない桜」であった。庭には千年桜といわ

かし、人生は面白くてきている。映画の脚本を書いていたが、その作品がビデオになって振り込みがあった。なんとか1年をしのげる振り込みであった。テレビのシナリオも書いていた。それで「亜也子」が書いたのである。上演時間4時間10分、東京

「亜也子」は「亜細亜の子也」の意味である。「亜也子」はわたしの40代のテーマであった。テーマも年代によって違ってくる。まだ昭和であった。いまのテーマは「二・二六事件とその時代の7人の女である。「阿部定

それからは「松浦物」といわれるシリーズを書き殴った。青年座や文学座、俳優座といった大手の劇団からも執筆依頼があ

であった。庭には千年桜といわ

れで「亜也子」が書いたのである。上演時間4時間10分、東京

は「追憶」七人の女詐欺師」である。(松浦市出身)